

# 自然誌 だぶり 秋

Natural history

三重自然誌の会情報誌 86号

2010年 12月

## 松阪市阪内川でオオサンショウウオ

オオサンショウウオは、岐阜県以西の本州と九州の一部に生息し、県内では木津川の上流部にあたる伊賀市や名張市および津市美杉町太郎生が分布域とされています。また、員弁川や朝明川、三滝川、鈴鹿川、雲出川、櫛田川、宮川の伊勢湾にそそぐ各河川でも、これまでに1～2個体の確認例はありますが、いずれも発見が単発で継続的に生息が確認できない等、これらの河川を本来の棲息地とするには疑問が残ります。現時点では、人為による放逸個体と考えていますが、岐阜・愛知両県の棲息地は伊勢湾にそそぐ河川ですので、自然分布の可能性も捨てきれません。一度きちんと調査をしなければと思っていたところ、新たに阪内川水系でオオサンショウウオ生息の情報が寄せられました。松阪市矢津町地内の阪内川支流勢津川で、2009年8月14日に風船堰の下でツルヨシの茂みに隠れているのを近所にお住まいの松本茂樹さんが発見、写真撮影され(写真1)、市・県教育委員会を通じて私にもメールをいただきました。発見地点は、勢津川が阪内川と合流する100m程上流で、写真2のように堰下の水深20～30cm水たまりです。下流から遡上してきたものの、堰で行き止まってしまったものと思われます。発見当日、私は松阪に不在でしたので、残念ながらこの個体を直接観察することはできませんでした。そこで、同年8月27日に、当該個体の再発見と当河川におけるオオサンショウウオの生息状況把握を目的として、中野環・谷口真理の両氏と私の3人で、発見地点の上下流一帯(小路橋下流の堰～崎谷橋間、約1km)での夜間調査を実施しましたが、空振りに終わりました。このオオサンショウウオがどこから来たのかは不明ですが、今でも、阪内川の茂みに隠れて暮らしているのは間違いありません。



写真1 オオサンショウウオ。2009年8月14日、松阪市矢津町勢津川。松本茂樹さん提供。



写真2 発見地点のようす。2009年8月14日、同。

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉

## 三重県藤坂峠南方の鍾乳洞近傍で採取した陸産貝類

柏木 健司

藤坂峠は、大紀町阿曾付近で広く発達する阿曾カルストの東端に位置します。藤坂峠周辺では、石灰岩は小規模なレンズ状岩体からなり、所々で急崖を形成しています。2010年10月21日実施の鍾乳洞調査の際、陸産貝類の死殻を採取し、幾つかの生体を確認しました。

藤坂の横穴：採取個体は全て死殻です。洞外の転石の下でギュウリキマイマイ(2 abc; 図1の番号に対応、以下同様)、オオケマイマイ(4 ab, 5 ab)、ニッポンマイマイ(6 ab)、およびピロウドマイマイの一種(8 abc)を、石灰岩急崖の窪みからギュウリキマイマイ(1 abc)を、洞内の洞床にてキセルガイの幼貝を採取しました。

藤坂の水穴：洞外にて、腐敗した軟体部を伴うギュウリキマイマイの死殻(3 abc)を採取しました。

藤坂峠の南斜面：斜面上において日没後にヤマクルマガイとヤマタニシの生体を確認するとともに、コベソマイマイの幼貝(7 abc)とオオギセル(9)の死殻を採取しました。

ギュウリキマイマイの2個体は、殻口端まで連続する1234型の色帯を持ち、火炎彩を伴います(2 abc, 3 abc)。色帯のうち1と3は相対的に幅広い傾向にあります。ピロウドマイマイの1種(8 abc)は、大きく開口する臍孔を持つことでヒラマキピロウドマイマイ(紀伊半島南部産)を思わせます。ただし、本標本は殻表の殻毛が極めて細かい点で、殻毛の粗いヒラマキピロウドマイマイとは大きな相違を持ちます。今後、生貝を採取して生殖器の検討などを行うことで、種を同定すべきと思われる。

藤坂の横穴を胚胎する石灰岩急崖には、固結角礫層を伴う裂罅ないし溶食性の窪みが所々にみられます。この窪みの堆積物表面から採取したギュウリキマイマイの殻表面は、目視で数十 $\mu\text{m}$ 程度の厚さ

の流れ石(鍾乳石の一種)で部分的に被覆(1 abc; 白矢印)されています。流れ石による被覆は、本個体が少なくとも数十年~数百年は経ていることを示します。

陸産貝類の一般的な分布調査は、生体を主体に死殻を補足的に対象とし、現在における空間的分布を明らかにします。一方、洞窟堆積物からはしばしば、過去数百年から数万年前に至る陸産貝類化石が産することが知られ、時間軸に沿う分布情報が得られます。陸産貝類の時空間的分布の変遷を明らかにする上で、洞窟から産する陸産貝類死殻および化石は、重要な研究対象の一つといえます。

現地調査に際しては、多賀町立博物館の阿部勇次博士にご協力を頂きました。陸産貝類の同定に際しては、和歌山県白浜町の湊 宏先生にご指導頂きました。記して感謝します。



図1 藤坂峠南方から採取した陸産貝類死殻。スケールバーはそれぞれ1 cmです。

〈かしわぎ けんじ：富山大学〉

## 三重県の離島にも生息していた！～微小な陸産貝類～

中 野 環

陸産貝類の生息は地形地質や植生に大きく左右され、特に離島では生息数や種類数等がそれぞれの島で異なることはよく知られています。最近、紀北町および大紀町の離島で興味深い陸産貝類の生息を確認しましたので報告します。今回調査した中で、大島の植物群落は天然記念物に指定されていますので、文化庁の許可を受けて実施しました(21受庁財第4号699号)。

1種目はノミガイ *Tornatellides boeningi* (Schmacker & Boettger, 1891) です。本種は、殻高3mmほどの円錐型の微小な陸産貝類です。熱帯系海浜性の種で、日本においては琉球列島から九州南部、四国南部、紀伊半島、伊豆半島西部、伊豆諸島まで広い範囲に分布します(湊, 2007, 2010)。分布は断続的で、これまでに生息が確認されたのは、西日本では島嶼部を中心に僅か20箇所程度です。三重県では1999年5月16日に志摩市志摩町沖の和具大島にある神社林内で確認されたのが最初の記録です(中, 2006, 2007)。

筆者は2010年8月8日、紀北町沖の大島にて本種を確認しました(写真1 a, b)。三重県では第2番目の生息地です。ノミガイを確認した場所にはウバメガシとススキが生育しましたが、落葉の堆積は殆ど見られません。ノミガイの生息範囲は狭く、個体数も決して多いとはいえません。

2種目はキバサナギガイ *Vertigo hirasei* Pilsbry, 1901です。本種は本州から九州にかけて分布し、溪流沿いのやや乾いた山麓や、斜面に生息します(東, 1982)。殻高1.5mm、4層ほどの微小な陸産貝類です。殻口が狭く、内唇に1歯、軸唇に1歯、外唇に2歯が見られます。これまで三重県からの生息記録はありませんでしたが、2009年7月4日に大紀町沖のキオ井島および2010年8月8日に大島にて本種の生息を確認しました(写真2 a, b)。

3種目はスナガイ *Gastrocopta armigerella* (Reinhardt, 1877) です。本種も1.5mmほどの微小な陸産貝類です。本種は本州から沖縄にかけて分布します。三重県では鳥羽市青峰山で生息記録があります(松本, 1979)。また、正式には報告されていませんが志摩市御座(県立博物館所蔵 阿部茂標本)からも得られているようです。今回、2009年7月4日に、紀北町沖のキオ井島にて、ウバメガシ、クロマツ、ススキの落葉中にキバサナギガイと共に生息を確認しました(写真3 a, b)。

今回報告した3種は微小であるため発見されにくい可能性もありますが、いずれも断続的に分布しています。自力での移動力は小さいことが予想されるこれらの種が、いかにして繁殖するのか、また、分布を広げているのか興味はつきません。

**文献**：東正雄(1982)原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社；中 優(2006)自然誌だより, 68, 5；中 優(2007)ノミガイの三重県における初記録。ちりばたん, 37(4), 217；松本幸雄(1979)三重の貝類, 三重県産貝類目録. 179pp.；湊 宏(2007)九龍島(和歌山県)の陸産貝類, 特に西日本におけるノミガイの分布について。南紀生物, 49(1), 61-66；湊 宏(2010)ノミガイの白崎石灰岩地(和歌山県由良町)からの初記録。南紀生物, 52(1), 37-38。



写真1 a 堆積物に付着するノミガイ(紀北町大島)



写真1 b ノミガイ(紀北町大島産)



写真2 a キバサナギガイ(紀北町大島)



写真2 b キバサナギガイ(紀北町キオ井島産)



写真3 a スナガイ(紀北町キオ井島)



写真3 b スナガイ(紀北町キオ井島産)

〈なかの たまき：度会町大野木 1711-1〉

# 三重県のトリウミアカイソモドキについて

締次美穂

はじめに

トリウミアカイソモドキ *Sestrostoma toriumii* (Takeda, 1974) は、甲幅約7mmまでのモクズカニ科の小型種である。雄より雌の方が大きくなるが、鋏脚は雌より雄の方が大きくなる。甲は丸みを帯び、額、側縁ともに歯も無く表面も滑らかである。鋏脚指部内縁には細かな歯が並び先端がとがる。歩脚先端は鋭く爪状である。甲および鋏脚、歩脚に見られる斑紋には個体差が見られる。アナジャコ類の巣穴に共生すると言われているが、高密度に生息する干潟では、本種が水深数cmの砂質表層を動き回る様子が観察されている(三浦, 2008)。



写真1 金剛川の干潟(2007年10月31日)

三重県内では、2003年に津市志登茂川で本種1個体が採集されており(環境省自然環境局生物多様性センター, 2007. 但し詳細データなし), 初記録であると思われる。なお、木村妙子氏(私信)によると、この個体の採集日は2003年9月26日とのことである。また2007年6月15日には津市田中川干潟で、甲殻類の調査に訪れた宮崎大学の三浦知之博士たちにより本種の生息が確認され、筆者が本種の生体を見たのはこの時が始めてであった。その後、三重県内での本種の生息状況を明らかにするため調査を行ったところ、新たに6箇所の干潟で生息を確認したので報告する。

調査地と方法

2007年7月から2010年3月にかけて、以下の県内7箇所の干潟で調査を行った。

田中川(津市河芸町)、雲出古川(津市雲出伊倉津町)、金剛川(松阪市高須町, 写真1)、櫛田川(松阪市高須町)、宮川(伊勢市御園町上條、伊勢市御園町小林、伊勢市大湊町)、外城田川(伊勢市東豊浜町)、紀伊長島区(北牟婁郡紀北町)である。

田中川、雲出古川、金剛川、櫛田川の各干潟では、干潮時にスコップを用いてアナジャコ類の巣穴を掘り、巣穴内に潜んでいるカニを探した。砂泥が崩れやすい場合は篩にかけて調査を行った。また、宮川、外城田川、紀伊長島区の各干潟では、タモ網を用い、潮間帯下部の砂泥中のカニ類を調べた。

発見個体の一部は採集し、液浸標本とした。

結果

田中川干潟では2007年7月7日に雄1雌2(内抱卵1)、2008年5月18日に雄1、雲出古川左岸では2007年8月4日に雄1雌1、金剛川左岸では2007年10月31日に雄1雌2、櫛田川右岸では2008年5月6日に雄4個体を確認した。また、宮川左岸(伊勢市御園町上條)では2008年5月7日に雄3雌3(内抱卵1)、宮川右岸(伊勢市御園町小林)では2008年6月17日に雄3雌1、宮川右岸(伊勢市大湊町)では2009年5月26日に雄2個体を確認した。さらに、外城田川右岸では2010年3月30日に雄1、紀伊



写真2 アナジャコの巣穴内で見つかったトリウミアカイソモドキ(右)と小型のエビ(クボミテッポウエビと思われる)。2007年7月7日、田中川干潟



写真3 トリウミアカイソモドキ雄, 2008年5月6日, 櫛田川



写真4 トリウミアカイソモドキ雌, 2007年8月4日, 雲出古川

長島区では2009年7月20日に雄1雌2個体を確認した(写真2~4)。

調査を実施した7箇所の干潟すべてにおいて本種の生息を確認することができた。今回の調査において採集した個体の最大は櫛田川で発見された雄で、甲長5.76mm、甲幅6.56mmであった。採集した標本は三重県立博物館に寄贈する予定である。

なお、宮川および外城田川の干潟では、本種とムツハリアケガニ *Camptandrium sexdentatum* Stimpson, 1858が多数見つかった。調査地は柔らかな砂泥が堆積しており、タモ網で掬うと一回で両種が3~4個体採集され、アナジャコ類の脱皮殻も混じっていた。ムツハリアケガニについては別稿で改めて報告する。

#### 採集標本

*Sestrostoma toriumii* (Takeda, 1974) トリウミアカイソモドキ：津市河芸町田中川干潟, 2008. V.18, ♂1；松阪市高須町櫛田川河口右岸, 2008. V.6, ♂4；伊勢市御園町小林宮川河口右岸, 2008. VI.17, ♂3♀1；伊勢市大湊町宮川河口右岸, 2009. V.26, ♂2；伊勢市御園町上條宮川河口左岸, 2008. V.7, ♂3♀3(内抱卵1)；伊勢市東豊浜町外城田川河口右岸, 2010. III.30, ♂1；北牟婁郡紀北町紀伊長島区, 2009. VII.20, ♂1♀2。

#### 謝 辞

三浦知之博士(宮崎大学)、木村妙子博士(三重大学)には、田中川干潟での調査に同行させていただき、県内での本種を調査するきっかけとなった。木村妙子博士には、県内における本種の採集記録について私信をいただいた。また篠木善重氏、乙部宏氏、清水善吉氏には、本文を草するにあたりご教示いただいた。以上の方々に記して感謝の意を示します。

文献：Davie, P. J. F. & Ng, N. K. (2007) Two new subfamilies of Varunidae (Crustacea: Brachyura) with description of two new genera. *Raffles Bulletin of Zoology* 2007. Supplement 16, 257-272；環境省自然環境局生物多様性センター(2007)第7回自然環境保全基礎調査。浅海域生態系調査(干潟調査)報告書：207；三浦知之(2008)干潟の生きもの図鑑。南方新社, 197pp。

〈しめつぐ みほ：津市河芸町上野560-14〉

## 大杉谷で熊に出会う

今年の秋は、熊出没に関する報道が多くあり、特に北海道で親子ヒグマが市街地をうろついている写真にはびっくりしました。熊は増えているのか、三重県でも大台町の民家に侵入した熊のニュースがありましたし、目撃情報も時々聞かれます。私も、大杉谷で熊(ツキノワグマ)に遭遇する機会がありましたので記録しておきます。本年10月15日に、紅葉を求めて大台ヶ原から大杉谷に下ったことです。まず、大杉谷登山道のシャナゲ平で、ミズナラの枝葉が大量に地面に落ちているのを見つけました(写真1)。そのミズナラの木の梢をながめると、熊の採餌痕特有の熊棚がたくさん残されていましたので、落ちた枝葉も熊による仕業と思われる。シャナゲ平をさらに下って栗谷小屋と堂倉小屋の分岐を栗谷方面に200~300mほど進んだところで、約30m先の樹でお尻から降りてくる熊1頭を10時36分に目撃しました。しばらくフッフツという鳴き声がしていましたので、カメラを構えて再度姿をみせるのを待っていましたが、やがて静かになってしまいました。この話を、帰途、大台ヶ原たたら亭のおかみさんにすると、今年の秋には、閉鎖中の栗谷小屋に2度も熊が侵入し、室内の食料をあさっていったそうです。2度目の侵入時には、換気扇の枠を外して入ったそうで、熊の執念に驚かされます。これまでに聞いたことがない出来事ですので、熊の増減と関係があるのかもしれませんが。

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉



写真1 散乱するミズナラの枝葉, 実はほとんど食べられていた。

## ウマスゲ～新たな生息地の現況～

篠木善重

カヤツリグサ科スゲ属のウマスゲ *Carex idzuroei* Franch. et Savat. は低湿地に生える高さ40～60cmの多年草で、三重県レッドデータブック2005では絶滅危惧 I B類 (EN) に選定されている。筆者は三重県津市河芸町中別保の海岸堤防下の休耕田で本種の群生を確認しているので、その現況を報告する。

50年以上前の記憶ではあるが、この辺りの水田では田舟を使って稲刈りをし、厳寒期には氷が張って、子供たちはスケートごっこをして遊んでいた。また、自然堤防に沿って、樹木の繁る間を流れる自然の水路があった。海岸堤防の改修後は水はけも相当改善されたが、土地の百姓から聞いた話によると、水門の管理を怠ると海水が水田まで流入してくることがあるという。現在も、降雨後は長い間水が残っている。まさにここは低湿地である。

この休耕田はここ数十年間稲作が行われておらず、時々耕運機で耕されているものの、ヨシ、シロバナサクラタデ、セイタカアワダチソウが毎年群生し、5月にはオオヨシキリの声も聞こえる。その中で育つ本種の高さは1 m前後にも達している(写真1～3)。5年ほど前から、この水田地帯で住宅団地の造成が始まり、また、隣接する水田が残土置場に利用され始めた(写真4)。

このような現況は、「近くまで埋め立てが迫っている生息地もあり、存続が懸念される。他の自生地でも、今後埋め立てや遷移の進行により減少する可能性がある。」と山本(2006)が心配する現況と同じである。とりあえず、水田の地主には希少な植物が生息していることを伝えておいた。

なお、本稿を草するにあたり加田勝敏氏には標本による同定をしていただき、「白塚の終末下水処理場予定地でも堤防際に自生していたが、もう埋められてしまっているだろう」とお聞きした。有益な情報まで提供していただいた加田氏に深く感謝する。

**文献：**山本和彦(2006) ウマスゲ *Carex idzuroei* Franch. et Savat. 三重県環境森林部自然環境室(編) 三重県レッドデータブック2005植物・キノコ：194, (財)三重県環境保全事業団；林弥栄・監修(1989) 山溪ハンディ図鑑 1野に咲く花。623pp, 山と溪谷社。



写真1 埋め立てが生息地の際まで進む津市河芸町の海岸堤防下。休耕田の水路際がウマスゲの生息地(2009年9月20日)



写真2 群生するウマスゲ(2009年5月2日)



写真3 ウマスゲの雌小穂。果胞はふくらみ、上部は長くちばし状になる。



写真4 ウマスゲが群生する休耕田周辺では宅地開発が進められている(2010年12月1日)。

〈しのぎ よししげ：津市河芸町中別保 2230-1〉

## 紀伊半島カモシカ個体群の分布の動向

富田 靖 男

紀伊半島カモシカ個体群は三重県および奈良県の中南部地域から和歌山県の中東部地域にかけて、他の生息地域から分断されて分布します。これらの地域のうち、台高山系、大峰山系、護摩壇・大塔山系の含まれる一部の地域は文化庁、環境庁、林野庁の3庁合意のうえで1989年に「紀伊半島カモシカ保護地域」に設定され、周辺地域も含め、8年に一度（2ケ年間調査なので前回調査の終わった6年後）の特別調査と、毎年の通常調査が実施されています。

第4回特別調査は2008年から2009年にかけて2ケ年実施され、筆者も指導委員会として取りまとめに携わってきましたが、その報告書が2010年3月に刊行されました（三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会、2010）。それによると、紀伊半島のカモシカ個体群の分布北限地域は、かつては、三重県では津市美杉町川上付近、奈良県では東吉野村、和歌山県では橋本市付近でありましたが、近年、三重県津市美杉町では保護および滅失（死亡）個体およびアンケートからみて、また、奈良県曾爾村ではアンケートからみて分布の北上傾向が認められます。

たとえば、分布北限付近の津市美杉町では1982年頃から出現しはじめたようであり（島地・富田、1984）、その後の滅失および保護個体については表1に見られるように、2003年5月1日に美杉町川上で雄死体が確認されており、2008年にはより北部地域で滅失個体が急増しています。三重県津市美杉町における北上ルートとしては、川上、奥津、比津、八知、下多気、下之川のものであり、隣接する奈良県では東吉野村、御杖村、曾爾村へと続いて、三重県と同時進行しているものと思われます。

滅失個体からみた現在の北限地は三重県名張市滝之原（北緯34° 63' 04"，東経134° 16' 54"）であり、2004年5月にニホンジカの食害防護用ネットにからまった死体が確認されていますが（三重県教育委員会・名張市教育委員会による）、あるいは奈良県曾爾村経由で来ているのかも知れません。この個体は三重県立博物館で保管されています。

なお、分布拡大傾向は同報告書によると北部へのみならず、三重県の東部および南部や和歌山県の西部および南部にも認められます。三重県の東部では1998年から1999年頃に多気郡多気町（旧勢和村地区）車川で親子が観察されており（富田・富田、2001）、現在ではさらに南東部まで進出しているものと思われます。

しかしながら、その原因を推察すると、カモシカの分布拡大を素直に喜べないところが多々あります。すなわち、同報告書よると紀伊半島カモシカ保護地域における今回の区画法調査による平均生息密度は、全国に12地域設定されている保護地域の中で最低の0.4頭/km<sup>2</sup>であり、前回（2000～2001年）の0.6頭/km<sup>2</sup>と比べて減少しております。一方、ニホンジカの平均生息密度は前回の2.9頭/km<sup>2</sup>に対して今回は4.1頭/km<sup>2</sup>で増加しており、今回の調査ではニホンジカの生息密度はカモシカの10倍という結果が示されています。また、今回の区画法調査では家族単位（幼獣を含む複数同時確認）は確認されなかったとのことであり、本来生息しているべきところのカモシカが少なくなっている現象が認められます。

カモシカとニホンジカとは競合関係にあり、ニホンジカの急激な増加がカモシカの生息に大きな影響を与えていることは明らかです。出合った時の相互干渉はもとより、食性も競合することから問題は深刻となっています。近年はニホンジカの広域的な摂食により、カモシカ生息地域においても下層植生がほとんど見られない所が多く、カモシカが姿を消す要因の一つとなっています。このような現象は紀伊山地保護地域のみならず、鈴鹿山地保護地域においても起こっております。たとえば、御在所岳周辺の稜線部は、かつてはカモシカ生息地として著名であったのが現在はニホンジカの楽園にとって変わり、ツツジ類やリョウブなどの樹皮剥ぎなども含めて食害が問題となっています。

表1 津市美杉町地内におけるカモシカの保護および滅失（死亡）個体

No.	場 所	確 認 年 月 日	性	
1	川 上 地 内	2003年5月2日	♂	死体確認
2	川 上 地 内	2008年4月7日	♂	転落死と推定
3	奥 津 地 内	2008年4月28日	♂	転落死と推定
4	下 之 川 地 内	2008年7月30日	♂	保護後8月1日死亡
5	川 上 字 坂 本	2008年12月2日	幼獣?	死体確認
6	比 津 地 内	2008年12月10日	♀	川へ転落後溺死
7	八知地内老ヶ野川右岸	2009年8月21日	不明	水田のシカ防護ネットに頭を突っ込む、 保護後放逐

\*三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会（2010）による

紀伊山地カモシカ個体群は現在平面的には分布拡大傾向にあり、鈴鹿山地においても近年、山麓部での保護あるいは滅失個体が報告されています。これについては上記の理由などにより、本来の生息地である山岳地を追われたカモシカたちが余儀なく里地に進出せざるを得なくなった結果と推察されますが、今後の人間日常生活圏における相互干渉が気になるところです。

ともあれ、三重県北西部および滋賀県東部には鈴鹿山地のカモシカ個体群が生息していますが、その分布南限地は現在のところ亀山市南部および滋賀県甲賀市付近にあり、紀伊半島個体群の分布北限地の名張市滝之原および津市美杉町下之川とは直線距離にして23～24km程度です。これらの両地域の間には道路、住宅、工業団地などの存在、あるいはニホンジカ食害防護用ネットによる事故など多くの障害があるものと思われそうですが、いつの日か両地域の個体群が繋がる可能性が無きにしても非ず、今後注目していきたいものです。

**文献：**三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会（2010）紀伊山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書（平成20・21年度）：219pp；島地岩根・富田靖男（1984）はしごの谷のニホンカモシカについて。三重動物学会会報，第7号：33－34；富田靖男・富田傑（2001）勢和村史。資料編二。第1編 勢和の自然環境。第3章 勢和の動物：54－177。

〈とみだ やすお：松阪市川井町822〉

## 事務局から

### ○原稿募集

会報「自然誌だより」の原稿を募集しています。次号「冬」の原稿締め切りは2月末日です。書き方が分かりにくい場合は事務局までお問い合わせ下さい。また、会誌「三重自然誌」も年度内発行を目指していますので、こちらにもご投稿ください。

### ○会費納入をお願いします。

会費未納分がある方は至急振り込んでください。また、退会される方はご一報ください。

### 編集 後記

今号はいろいろな記事をいただき、はやりの言葉でいうと多様性豊かな誌面になったのではないかと思います。今秋、生物多様性保全についての国際会議が名古屋で開催され、この分野についての盛り上がりには驚きました。もっとも、当会はその波に乗ることができなかったのですが、地道に地域の自然誌の研究を蓄積していきたいと考えていますので、積極的なご投稿をお願いいたします（善）。

## 自然誌だより86号

発行日 2010年12月10日  
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17  
清水善吉方 三重自然誌の会  
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会  
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会  
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）  
e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp